

## 立命館大学国際関係学部創設 30 周年を記念して

『立命館国際研究』の月号は、立命館大学国際関係学部の創設 30 周年を記念して刊行されるものであります。『立命館国際研究』は、国際関係学部が創設された 1988 年の立命館大学創立記念日、5 月 19 日に 1 巻 1 号を刊行して以来、これまで 30 年にわたって、国際関係学部の教員・院生の研究成果を発表し続けており、月号は 31 巻 5 号となります。

他の大学・学部の紀要と同じように、『立命館国際研究』も、同僚の先生方が定年退職を迎えられるときに、先生方への感謝の気持ちをこめて、退職記念号を刊行いたしますが、月号はさらに特別であります。月号は、立命館大学国際関係学部に卒業した研究者の方々による論説とメッセージで構成された特集号であります。この 30 年間に国際関係学部あるいは大学院国際関係研究科を卒業・修了して、大学等の研究機関に就職した校友は 50 名を超えます。月号に寄稿して下さった方々はその一部です。国際関係学部・国際関係研究科が研究者養成の役割を果たすことができ、まことにうれしく思います。また、月号には、草創期の国際関係学部に勤務されて、学部の基礎を築かれた先生方にお話をお伺いする座談会も掲載しております。

『立命館国際研究』の 30 年間も興味深いものであります。1 巻 1 号に掲載された「開設記念シンポジウム 新しい国際化をめぐって——これからの国際関係論と地域研究」に始まり、「国際関係学を考える」研究会の成果（1994-95 年）、あるいは客員教授の講演記録（森嶋通夫氏、明石康氏、1994 年）、客員教授の論説（Johan Galtung 氏、1997 年）、国際関係学の自己省察（小林誠「国際関係学の葬送のために（上・下）」1995-96 年）等々、多彩です。

近年の号では、国際関係学部創設 30 周年記念講演会シリーズ「国際関係学の再創造」からいくつかの講演を掲載していますが、とりわけ、Amitav Acharya 氏（アメリカン大学教授・本学客員教授）の“*What is Global IR?*”（30 巻 2 号、2017 年）は重要です。国際関係学（*International Relations*）という学問は、第 1 次世界大戦後の英米で始まったもので、ある意味ではパックス・ブリタニカ、パックス・アメリカナの「統治・運営」のための学問でしたが、パックス・アメリカナの黄昏期というべき現在、国際関係学のさまざまな新しい潮流が生まれています。その 1 つが Acharya 氏が主唱するグローバル国際関係学（*Global International Relations*）であります。グローバル国際関係学とは、これまで軽視されてきた

非西洋世界諸地域の経験・思想にも光を当てて、西洋中心、米国中心の国際関係学をより普遍的なものに変革しようとする試みといえます。このアプローチは日本の国際関係学にとっても大いに参考になると思います。わたしたちは、Acharya 氏の主張を視野に入れつつ、2018年4月に、American University-Ritsumeikan University Joint Degree Program in Global International Relations をスタートさせました。

日本の国際関係学を確立することがわたしたちの目標であります。国際関係学部創設30周年を超えて、わたしたちの挑戦はまだ続きます。引き続きご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。

2019年3月

立命館大学国際関係学部長 君島 東彦